

フィリピン共和国へ MABUHAY！

桜井 真

(16-1, フィリピン, 理数科教師, 海田町立海田中学校)

はじめに

皆さんは今までにフィリピンの国旗・国歌をご存知ですか？私は協力隊としてフィリピンに赴任が決まるまで全く知りませんでした。なかなか諸外国の国旗・国歌まで興味を持つことはないと思います。任国で活動するにあたって、関係者との相互理解は不可欠です。相手に敬意を持って接しなければなりません。フィリピンにおいて国旗・国歌はシンボルとして尊重されています。フィリピンでは映画館の放送前にも国歌が流れますし、生活の中でフィリピンの国歌に接する機会は多く、知らないでは敬意を払ってないことになりかねません。フィリピンは植民地としての長い歴史をもち、国歌は「侵入者たちが踏みしめることはできない」と祖国の永遠の独立を願う国民の心情を表しているそうです。私は、この1年9ヶ月間の間におかげさまでフィリピン国歌が歌えるようになりました。

マブハイとは、フィリピノ語で「ようこそ」を意味します。これから少しの間、皆さんに気持ちだけでもフィリピンへお越しいただければと思います。

1 フィリピン共和国

(1) フィリピンについて

正式名称はフィリピン共和国 (Republic of the Philippines) です。フィリピンには7000を超える島があります。総面積は約30万km²で、北海道を除いた日本の面積とほぼ同じです。公用語は英語とフィリピノ語（タガログ語）となっており、この他各地に80種類以上の言語があると言われています。国民の83%がカトリック、10%がその他のキリスト教、5%がイスラム教です。

(2) ネグロス島バコロド市について

私が赴任したネグロス島は、マニラから飛行機で1時間南下したところにある4番目に大きな島です。州都であるバコロド市の人口は約43万人。ネグロス島第一の都市です。

2 フィリピンの学校

(1) フィリピンの学校事情

フィリピンの義務教育は、小学校6年間、高校4年間です。小学校は6～12歳、高校は13～16歳の生徒が通っています。しかし、家庭の事情で登校できない子どももたくさんいるため、一旦学校に来られなくなっても、いつでも復学することができるようになっています。よって、小学1年生といっても様々な年齢の子どもたちが在籍しています。学年が上がるにつれ女子生徒の割合が大きくなっていきます。その背景には、男子生徒は学校を辞め労働力として働かなければならない家庭があり、退学率が高いということがあります。

(2) フィリピンの学校生活

7:30には登校し、毎朝全校集会（国旗掲揚・国歌斉唱）が行われます。7:50から午前の授業が始まり、11:30に昼休憩に入ります。昼休憩には子どもたちは自宅に帰ってご飯を食べます。13:00から午後の授業が始まり、16:00に下校するといったのが一日の流れです。放課後は、日本のような部活動はありませんので、自分たちで各自グループを作り、ダンスやバスケット・セパタクローなどをしています。

(3) フィリピンの授業・クラス

授業は、フィリピン語・英語・数学・理科・社会・芸術（音楽・体育・美術が一緒になった授業）があります。1日に6つの授業があり、教科によって授業時間が決まっています。（例：数学60分、芸術80分など）クラスは、「1クラス50人未満」と政府が推奨していますが、実際には1クラス60～80人で行われているのが現状です。フィリピンでは、学力によってクラス分けがされています。教室は日本より少し狭い感じでしょうか。生徒は机つきのイスに一人ずつ座っています。教科書は学校に保管されていて、授業の時に貸し出されます。生徒達は各自ノートを持参します。

(4) フィリピンの学校設備

ネグロス島では、校舎は1階平屋建てがほとんどですが、右上の写真のような2階建ての校舎も少しずつ増えています。フィリピンの校舎は、フィリピン政府によって建てられたもの、JICAの援助により建築されたものもあります。最近では、中国の援助によって建築されているものもあります。校庭は、緑が多いのが印象的です。職員室はありません。各先生の教室が決められていて、その教室で仕事をされています。家庭科室や音楽室などの特別室はありません。ゲストルームがあり、そこで調理をしたり、食事を摂ったりしています。音楽の授業は一般の教室で行っています。ピアノなどはなく、歌を歌ったり、外でダンスをしたりします。大きな学校には、コンピューター室があります。コンピューターは、日本・中国からの援助品でした。トイレですが、各教室の角にあります。水洗ではなく、上から桶などを使用して水を流すタイプです。壊れていることもあり、衛生的にも問題があります。地域によっては、水自体もないところもあります。トイレ設営に関しては、対応が必要であると感じました。

3 フィリピンでの協力隊活動

他の派遣国では協力隊員が学校に配属され、生徒に直接授業などを行っているところが多いようです。ここフィリピンでは教師を対象にした技術移転の活動を行っていることが大きな特徴です。私にとっては技術交換の活動になりました。現職参加ですので、実質フィリピンでの活動は1年9ヶ月になります。1年9ヶ月の間で行った主な活動をあげてみました。

(1) S B T P (教員研修会) への参加

① S B T P (教員研修会) とは

地区ごとに行われる教員研修会のことです。各地区ごとに月1回開催されます。いくつかの学校の教員が集まり各教科に分かれて模擬授業、検討会を行います。かつてのフィリピンでは教師主導型の授業が多かったのですが、現在では生徒主体の授業形態に変えていこうと多くの先生方が努力を重ねています。「生徒達に考え、発見させるためにはどのように授業を仕組んでいけばいいのか」先生方はS B T Pの中でこれらの事について議論します。

中学校の数学教諭である私は、現地でも主に数学を担当していました。現地の先生方と共に模擬授業を参観し、授業後のCritiquingと呼ばれる検討会に参加しました。その検討会で、生徒が興味をもって数学の授業に取り組んでくれるような題材や教具開発のアイディア、班活動の活用方法、黒板の使い方や発問の仕方、ノートの活用の仕方などを紹介しました。

② S B T P の成果と課題

成果としては、

1) 先生方が間違いや失敗を恐れなくなりました。もし間違いや失敗があったとしても、その後の検討会で学び、今後活かしていければよい、このように考える先生方が増えてきたように思います。これにより、教える単元を模擬授業で取り上げることも増えてきました。

2) 生徒の間違いを否定しなくなってきました。以前は生徒が間違いをすると「なぜできないのか？」と怒ってしまう先生もたくさんいました。間違いから学ぶという姿勢が先生方に見えてきたように感じます。ただ、「なぜその間違いが起こったのか」「なぜ生徒はそのような間違いを起こすのか」について分析の甘い先生も多く、これからのS B T Pで先生方が学んでいくべきことのひとつであると思います。

3) ネグロスオキシデンタルでのS B T Pは4年目を迎え、マンネリ化してきている部分もあります。このマンネリを打破するために、取り上げる単元に変化が起きてきました。先生方が苦手としている学習内容にも目が向き始めたのは大変よい兆候であると思いました。

課題としては、

S B T Pをやめたいと感じている教員が多いのも事実です。「模擬授業にはお金が

かかる」という理由です。準備物（紙やマジックなど）の購入費が、現在先生方の負担となっていることが不満なようです。模擬授業を日々の授業に活かしていれば、決して無駄な資金ではないはずですし、費用をかけない模擬授業の研究をしていけばよいと思います。

③ 活動する中での困難

1) 私が赴任して真っ先に提言したのが、「授業中のスナックの禁止」です。赴任した当時は、模擬授業中、参観している先生にスナックが配られ、授業中にもかかわらずスナックを食べ、雑談に花が咲くことも多かったのです。自分の提言の後に授業中のスナックは禁止となり、それにより授業に集中して参観している先生が増えてきたように感じました。しかし、SBTPの楽しみの一つを奪われた先生方からは当初かなり反感の声や態度がありました。一方では、そういった習慣に疑問を感じながらも提言できずにいた先生もいたようです。

2) SBTPでは、良い結果を求めるあまり（悪い結果を避けるあまり）、模擬授業には成績の良い生徒を選び、また生徒に理解しやすい簡単なトピックが取り上げられることがありました。授業後の検討会でも、「よい授業であった」とまとまってしまうことがありました。「実際には、この授業内容を完全に理解できない生徒もいるはず。普段の授業でも使えるようにするには、何を改善していけばいいのか」このような提言をしてきました。このような私の発言は、円満に模擬授業・検討会を終えようとする先生方にとっては水を差す発言であったようです。これらの手厳しい指摘を歓迎してくれた先生もいましたが、拒否感を示した先生もいました。

(2) 生徒対象のワークショップ

近郊の隊員の力も借りて生徒対象のワークショップを10校以上の学校で行うことが出来ました。このワークショップで、私が担当したのは数学と平和学習です。

① 数学

まず、数学の授業は、「数学の楽しさ」を伝えたい、という思いで行いました。ワークショップでは、「学んだことを活用する」ことを目的とする授業を行いました。

ワークショップに先生方にも参観して頂くことで、日本の授業のやり方、声かけの仕方、生徒への接し方を見てもらい、普段の授業を見直し活かしてもらうという目的も兼ねることができました。そして、このワークショップは私にとってフィリピンの生徒たちと触れ合うことができる大切な時間でした。小学校では「タングラム」や「Four Fours」、高校では同じく「タングラム」や「凹四角形の内角と外角の関係」などの学習をしました。簡単なゲームも交えて行い、生徒は楽しんでいたように思います。

② 平和学習

昨年戦後61年を迎えましたが、人々の記憶から薄れ風化していくことのないよう、広島出身者としてヒロシマでの悲劇を世界に伝えていかなければならないという思

いから平和学習を行いました。原爆資料館からお借りした佐々木禎子さん（被爆後遺症により白血病で亡くなった少女）を題材にしたアニメビデオやポスターを用いて原爆（核爆弾）の被害について知ってもらいました。これからの将来戦争のない平和な世界にしていくために、自分たちに何ができるのか、自分たちのすべきことは何かを共に考え、相互理解の重要性を述べました。短い時間の中で十分に理解してもらえたかといえは無理だとは思いますが、少しでも頭の片隅に残り、そしてまたいつか将来平和について考えてくれるきっかけにでもなればと思っています。

フィリピンの平和学習では「ミンダナオ島でのモロ民族解放戦線とフィリピン軍との紛争」などを学ぶそうです。平和学習を通じて、お互いに理解し合うことが大切であることを学習するそうです。フィリピンは、現在でもマニラや地方各地で度々テロによる爆発事件などが起き、平和について考えさせられる出来事が身近にあります。

小学校の歴史の授業では、第二次世界大戦で日本軍がフィリピンに侵略してきたことを学んでいます。日本軍がかつてフィリピン人に行った虐殺行為を歴史事実としてきちんと学ばれています。しかし、授業の最後に先生方はこう言われます。Now Japanese are BEST FRIEND for Filipinos. 日本と友好関係を築こうとしてくれていることにうれしく思いました。毎年多くの日本人がフィリピンを訪れて交流を深めてくれているという努力があるからと感じます。

今後も子どもたちに自分達の将来の世界について考えて欲しいと、平和学習に使用した資料の一部を学校に寄贈してきました。

（３） Math Challenge への参加

年一回各地区の学校代表が集い、数学コンテストが行われます。そのコンテストの準備や審査に携わりました。代表となった生徒たちは学校の名誉をかけて競っていました。

（４） ポンテベトラ小学校・高校への定期訪問

S B T Pでは、準備が周到にされた授業しか見る事が出来ません。S B T Pで学んだことがどれだけ普段の授業に活かされているのか、普段の授業の問題点は何か、を知るために赴任１年後辺りからポンテベトラ小学校・高校に定期訪問を始めました。これにより、普段の授業とS B T Pの模擬授業との違いを見ることができ、生徒の実際の学力や授業での様子を知ることができました。S B T Pでは、先生方との話し合いが多く、なかなか生徒とゆっくりと話をする時間がありません。この定期訪問では、ゆっくり生徒と話をする事ができました。また、S B T Pでは参加者の先生方は私のことをスペシャリストとして見るため、微妙な距離を感じる事がありました。しかし、定期訪問している学校の先生方は、私を同じ一教師として見てくれるため、本音で語り合うことができ、気軽に質問もしてくれました。日本とフィリピンの教育の違いについても語る時間が十分にあり、フィリピンの教育の問題点を更に深く知ることができました。

(5) JOCV NEWS の発行

同じオフィスに配属になった隊員(16年度2次隊)とともに、私たちの活動や活動の中での気づきを多くの人に知ってもらうためにニュースレターの作成を始めました。ニュースレターは月一度の発行で、私たちがSBTPで訪れた学校の紹介、SBTPの様子、その他の活動の紹介、SBTPに関する私たちの考察を記事としました。各学校に配布したところ、なかなか好評でした。このニュースレターは、カウンターパート、また配属先の責任者へ、私たちの活動を報告する大切なレポートとなっていました。

(6) フィリピン通信発行

派遣当時の日本での配属先である広島県江田島市立大柿中学校に、フィリピンの文化・生活習慣などを少しでも知って国際理解を図ってもらいたいと思い『フィリピン共和国へMABUHAY!』というフィリピン通信を月1~2回程度発行していました。

また、自分の活動の報告や、通信をメールで送信することで生存報告も兼ねていました。忙しくて発行できない時もあり、最終的にはNO.16までの発行となりました。

(7) JICA-Net での国際交流

同じフィリピンの協力隊員の活動のお手伝いをしました。JICA-Net というオンラインによるテレビ会議装置を使った遠隔システムを使用し、平和について双方の生徒が話しあいました。

バタアン州は歴史の中で日本と深い関係があります。このバタアンではかつて**バタアンの死の行進**と呼ばれる、日本軍による残虐な行為が行われました。この場所は、フィリピン国民にとって**WAR MEMORIAL PLACE**として広く知られており、毎年4月9日は「**バタアンの日**」として国民の休日となっています。そういった歴史をもつバタアン州と広島の生徒をつなげたいという隊員の思いが形となりました。

(8) 日比の学校間でのカード交換

JICA中国を通して、「カード交換を希望している中学校があるのですが」という話が入ってきました。そこで、私が定期訪問していたポンテベトラ高校にお願いしました。

実際に手紙を持って教室に入ると、「早く見たい!」「早く返事が書きたい!」とすごく興奮していた様子でした。手紙を書いている最中も、「男の子か女の子か、どっち?」「日本の生徒はみんな仲がいいの?」など、いろいろと質問を受けました。日本のことをもっと知りたい、フィリピンのことを伝えたい、と一生懸命書いてくれました。

フィリピンの生徒の考えていることや流行しているもの、また教育事情についても、日本の生徒の皆さんに理解していただく良い機会になったのではないのでしょうか。また、英語の勉強にもなったのではないのでしょうか。このような国際交流は、双方の生徒にとって心に残る貴重な体験になったと思います。

世界各地に協力隊員は派遣されています。協力隊員の方々を活用してこのような計

画を実施することは双方にとって有益なものになることと思います。私自身も良い経験をさせていただきました。

4 協力隊に参加して

(1) 現地での苦悩や喜び

① 言語

私は昔から英語が苦手で、ましてや現地語のイロongo語も習得しなければならない。赴任当初は思ったことが表現できず、たいへん悔しい思いをしました。普段の生活の中ではできるだけイロongo語で挨拶するように努めていました。現地語で話しかけると、やはり相手との距離がグッと近くなる感じがします。異なる言語を持つ人々が、英語・イロongo語・日本語を通じて、お互いの文化や習慣について語ったり、笑いあったりすることができます。日本語だけでは知りえなかった世界がそこにはありました。

② 生活習慣・生活リズム

また、苦勞したこととしてフィリピン人の生活習慣・リズムです。口頭で約束したこと、約束した時間を重要視してもらえなく、計画が先延ばしにされたり、長時間待たされたことが多々あり、かなりストレスでした。

③ 治安

フィリピンは治安が悪いと思われがちですが、フィリピンで暮らしてみると、そこまでの治安の悪さは感じません。しかし、自分の注意力が落ちている時に被害に遭います。実際、街中を歩行中に携帯を盗まれたり、家に泥棒が入りました。

(2) 協力隊に参加して感じたこと

① 外国語習得の必要性

私も海外に出て英語の必要性を実感したのと同時に、日本人の英語力の現実を知りました。フィリピンでは、フィリピン人だけではなく、中国・韓国・マレーシア・インドネシア・アメリカなど各国の人々と英語を共通語として会話をします。経済大国・技術大国として各国に知られている“日本”ではありますが、日本や日本人を誤解している人々はかなりのものでした。英語が話せなければ、日本の文化や日本人の考えや慣習など伝えることもできず、相手に誤解を与えたままになってしまいます。ちょっとした誤解が大きなひずみになることも経験しました。

② 豊かさの本質について

フィリピンは経済的・物質的に豊かというわけではありませんし、情報量も多くありません。しかし、人々はその中でも日々模索し、様々な発見をし、生活しています。家族を大切にする心、人との触れ合いを大切にする心、物を大切にする心、家族とゆったりと過ごす生活など、今の日本人が少し忘れかけていることを再認識させられました。

③ 国際協力の実際

今まで知らなかった JICA を含め他の団体の国際協力活動にも触れることができました。他の国の様々な国際援助の実際を知り、そういったニュースにも敏感に反応するようになりました。

④ 国際人としての日本人のあり方

これからの世界の安定のためにも日本が国際協力・国際交流に参加していくことは国際社会の一員として必要であることは確かです。もっと多くの日本人にも他人事ではなく、国際社会に興味・関心を持って注目していかなければならないと思います。

⑤ 日本の良さを再認識

異なる言語・文化・生活環境の中で生活したことで、日本語・日本の技術や文化など日本の良さを実感し、自分が日本人であることを再認識した気持ちです。

5 学校現場への還元

フィリピンでの協力隊活動や生活・経験し得たことを、今後は同僚・生徒・地域へと還元していきたいと考えています。

(1) 教員・生徒への還元

① 協力隊活動での経験の紹介

現地で珍しい食べ物に驚きました。トイレなど劣悪な衛生状態に多々苦しみました。風土病にも罹りました。様々な経験を重ねていくうちに、その生活にいかに適応するか知恵がついてきました。そんな異国での経験を話していきたいと思います。また、学校に行きたくても行けない子ども、家族を養っていくために働きに行く子ども、ノートが買えない子どもに会い胸を痛くする経験をしました。フィリピンの生徒の勉強に対する姿勢も伝えたいと思っています。もちろん、貧困という点だけでなく、フィリピンの優れた点や異なった視点によるものの見方を伝えていきたいと思っています。

② 現地情報の提供や紹介

同じアジアの国フィリピンですが、“犯罪が多い”など日本人から誤解されている部分も多いです。しかし、フィリピンは毎年多くの外国客が訪れる素敵なリゾート地を持つ国でもあります。また、フィリピンは歴史的にも日本と大変深いつながりのある国です。もっと多くの人々にフィリピンについて知ってもらい、友好的関係が築けていけたらという気持ちを持っています。

③ 異文化理解・国際協力の授業

④ フィリピンの学校の生徒達と手紙などを通して交流

私達が相手のことをよく知らないのと同じように、相手も日本のことをよく知らなかったり、誤解していることが多々あります。現実にはそんな誤解が摩擦となって関係がこじれている国もあります。相互理解を図るには相手の生活・文化・宗教・抱えている問題などを知り、それを受け入れなければなりません。頭では簡単なのですが、

実際には難しいものです。だからこそ、時間をかけて伝えていきたい事柄だと感じています。また、異文化を知ることで、日本の文化にも触れ、再認識できる機会だと思っています。英語の苦手な私でしたが、相手のことを知りたいという気持ちから、英語で話す楽しさを覚えました。世界は本当に広く、未知数です。多くの出会い・経験をしていってほしいと願っています。

⑤ 教材教具の提供・紹介

教材教具が不足していたフィリピンで、そこにある物を使用して如何に物を作り出していくか、クリエイティブな部分を大切にすること、工夫することの大切さを伝えていければと思っています。

(2) 学校以外の教育活動において

協力隊活動を通じて国際協力への理解を深めることができました。今後は、JICAなどのイベントなどを通じて地域での国際協力への理解の向上にも貢献していければと考えています。

最後に

現職参加という制度のお蔭で私にも国際協力の世界を覗く機会がいただきました。協力隊に参加できたことに大変感謝しています。派遣前訓練を含め協力隊活動は、厳しい場面・状況に遭遇することも多々ありました。この経験が私のこれからの人生・教師生活において糧となることは間違いありません。多くの子ども達に世界に興味を持ってもらうこと、世界をもっと知ってもらうこと、そういったことも大切にできるような教師でありたいと思っています。

